

蜀における楊雄の處世と學問

楊雄は前漢宣帝の甘露元年（前五三）に生まれ、王莽新の天鳳五年（後一八）に没している。七十一年の生涯は、四十代前半の上京を境として前後に分けられる。^①前半は蜀にあつて學問と辭賦の創作に勵んだ修業時代であり、長安での後半生を導く基礎を築いた時期である。

そこで小論では、蜀出身の人物として楊雄の生涯に注目したい。前漢における蜀は、『史記』西南夷列傳や『漢書』西南夷兩粵朝鮮傳によつて知られるように、異民族統治の據點であつた。同時に司馬相如、王褒、楊雄という優れた辭賦作家を輩出している。この邊境の蜀から四十歳を過ぎて上京し、仕官する意味、四十歳に至るまでの學問形成について探つてみようと思う。特に同時期の蜀出身者と比較し、楊雄の處世の特色を考えてみることにしたい。

一、前漢の蜀

まず前漢における蜀の状態を一瞥しておこう。

『漢書』地理志下に「巴・蜀・廣漢は本と南夷にして、秦并せて以て郡と爲す」とある。秦以前は南夷であつたところに、巴・蜀・廣漢の三郡をおいたことからこの地域の漢化が始まつた。同志上にはまた、漢中郡も秦が置いたとあるので、巴・蜀及び廣漢・漢中は漢初には設置されている。南接する犍爲郡、越巂郡や更に南の益州郡、牂柯郡が武帝によ

つて開かれたのとは區別する必要がある。以上の八郡に廣漢郡から後に分割された武都郡を加えた九郡が、益州である。益州の中では蜀が最も榮え、人口は百二十四萬人を數えている。他の八郡は、最多の巴郡で七十萬、最少の牂柯郡となると僅か十五萬であるから、歴然たる差が認められる（『漢書』地理志上・下）。

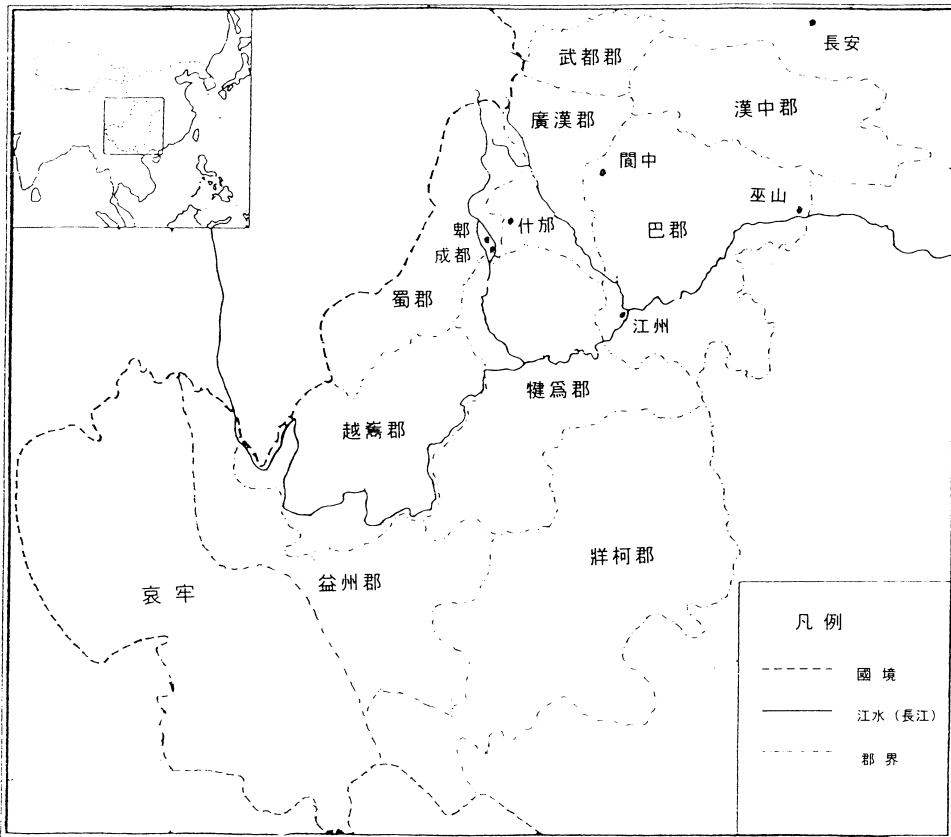
漢王朝にとつて益州北部を占める巴・蜀・廣漢・漢中の四郡は、武帝によつて南方の四郡が開かれるまでは西南夷と國境を接する前線地區であつた。かの司馬相如が都長安と蜀の間を往復し、唐蒙とともに西南夷の道を開こうと盡力したのも武帝期である。また、武帝期を境にして巴蜀地區からの人材が中央で登用されるようになっていく。^②前漢の西南地區は、武帝の時代に至るまでは西南夷に近く、武帝以後になりようやく漢王朝との距離を縮めたものと思われる。

ただし『漢書』西南夷兩粵朝鮮傳、『後漢書』南蠻西南夷列傳を見ると、前漢後期となつてもなお反亂は止むことなく、王莽の新、後漢に至つても南方地區にしばしば出兵している。その際には北方四郡より徵兵し、派兵の根據地とされることが多かつた。

二、出自

では益州蜀郡における楊雄の半生をたどつてみよう。楊雄に関する傳

楊雄は蜀の成都の人である。ただし、一家が成都に移り住んだのは前漢の武帝期以後である。本傳によれば楊雄の祖先は周室の伯僑であり、



前漢後期の益州刺史部（羅二虎『秦漢時代的中國西南』附圖をもとに作製）

記資料は『漢書』楊雄傳が「楊雄自序」に基づいており、班固の贊も補うところがある。以下では、これらの資料を主として半生を探ることとする。

晉の楊（山西省洪洞縣）を封地とした。後世、楊侯を名乗ったが、戰國期には楚の巫山（重慶市巫山縣）に逃れ、楚漢が興ると長江を遡り巴の江州（重慶市街）に住んだという。そして武帝の元鼎間（前一六〇—一一一）に至り、仇を避け郫（成都市郫縣）に住んでいる。このように楊氏の祖先は蜀出身ではなかった。

楊家では、五世前の楊季が廬江太守（安徽省廬江縣）となつてはいるが、主に農蠶を生業とし、一子にて相續してきた。自序に言うのであるから、楊家には太守以上の者は出なかつたのであろう。資産は十金を過ぎないというから、窮乏こそしていないが、豊かな家柄ではないようだ。恐らく楊雄の出仕が四十歳を過ぎたことは家柄と無關係ではなからう。司馬相如は資産を獻じ、若くして郎となつている。

三、前半生の作品

次に楊雄が蜀での前半生において制作した作品を検討してみたい。まず本傳に記されているのは、「反離騷」、「廣騷」、「畔牢愁」である。このほか『楚辭』天問に解を加えたと伝えられるから、前半生において『楚辭』を深く學んでいたのは明らかである。屈原を弔うべく「反離騷」を作つたと言うが、蜀からは司馬相如、王褒という辭賦作家の生まれてゐることも、『楚辭』への傾倒を促したことであろう。そもそも楚と蜀はともに長江水系に位置している。かつて楊家があつたのは楚の巫山であり、巴の江州、蜀の郫へと遡つて來た経路は、あたかも『楚辭』の傳播の跡を辿るかのようである。楊雄が『楚辭』を學んだ背景には、地理的要因もあつたのではないだろうか。

「蜀都賦」（『古文苑』卷四所收）も在蜀期の作と考えられる。一部脱文があるようだが、なお言語能力の高さを示す長編である。

以上の他に題名のみが傳わる作品に、「綿竹頌」^⑦、「縣邸銘」、「王何頌」、「階闔銘」、「成都城四隅銘」^⑧がある。これら二篇の頌と三篇の銘は、文體の性質から考えて辭賦に較べ短編であつたものと思われる。佚文すら傳つていないことからすれば、早年の習作と言ふべき作品であつたのだろう。

蜀において楊雄は、頌や銘といった文章を綴り、辭賦を制作した。蜀においてどのようにして文章力を身につけたのか考えてみるならば、幼年にはまず當時の通例に従つて學塾に通ひ、『蒼頡』のような小學書を學習したのだろう。その上で『楚辭』を學び、司馬相如の辭賦について造詣を深めたものと思われる。「反離騷」や「蜀都賦」には經書や子書の語も見えるから、經學や諸子も學んでいる。また、嚴遵を師と仰いでいるから『老子』や『易』も學んでいたに違いない。まさに本傳にいう「博覽にして見ざる所無し」という状態である。ただし理解の深度という點では疑問もある。「章句を爲めず、訓詁に通ずるのみ」(本傳)という學習態度をとつたのであるから、「一經に通ず」(『漢書』儒林傳)などと稱された當時の他の學者に較べ、經學に通曉していたとは考え難い。後述する通り、當時の經學とは明らかに距離があつた。

四、成都周邊の學問

まず當時の蜀人には楊雄より經學に通じていた數名の人物が認められる。そこで彼らの人物像と蜀の状況を見ておこう。

『漢書』循吏傳によれば、前漢の前期の蜀はまだ「僻陋にして蠻夷の風」があつた。それを蜀の郡守となつた文翁なる人物が教化した。文翁は成都に學官をたてて教育に盡力し、ついに「蜀地の京師に學ぶ者、齊魯に比す」ようになったとある^⑩。

それが前漢後期になると經學に通じ、教授する者が現れる。たとえば譙玄は、巴郡閬中の人であるが、『易』と『春秋』に優れていた。そして成帝永始二年(前一五)に推薦を受けて議郎となり、太常丞、中散大夫となつてゐる^⑪。趙賓も蜀出身で、易を治め孟喜に教授したという。孟喜と同時であるから、昭帝・宣帝期(前八七〜四九)の人である^⑫。ほかに廣漢郡什邡の人、楊宣は災異に長じ、百人以上の弟子に教授している^⑬。そして『漢書』五行志(下之上)や元后傳には哀帝(前七〜一在位)に進言したことが見える。後に詳述するが、何武(前七五〜七二?〜後三)に至つては楊雄と同じ蜀郡郫縣出身で、博士に經學を學んで『易』を治め、射策甲科に及第し、最後は三公にまで登つてゐる^⑭。このように成都周邊地區にも、學問に優れ中央に招かれた人物が少なからずいた。とはいへ『史記』『漢書』儒林傳に名の遺る經學者は、他の地域に較べ極めて少ない。

他方、辭賦作家については出自の明らかかな者が限られる。蜀出身者で作品の傳わるのは司馬相如、王褒のみである。いずれも大家であるが、世代は遡る。楊雄と同時の作家では、劉向、劉歆、班婕妤がいるが、いずれも宮中で活躍した人物である。

五、諷諫と經學

蜀出身者の中で、上京前の楊雄はどう評價できるだろうか。晩年にこそ『太玄』『法言』によつて經書の知識を披瀝してはいるが、上京の際に成帝に推薦されたのは、文が司馬相如に似ていたためであつた。そもそも『太玄』『法言』という著作は、上京後十年程を経て、楊雄の個人的な欲求によつて著されたものである。宮廷で楊雄に求められたのは上京直後に獻じた「甘泉」「河東」「校獵」「長楊」の四大賦や「趙充國頌」「元后誄」^⑮といった文であつた。つまり楊雄はあくまで文章家として上京し、

官を得たに過ぎない。一經に通ずる士でなければ、博士に學んでもいない。

しかしながら上京後は、黃門侍郎として成帝には「酒賦」を作つて諷諫^⑩し、哀帝には單于の朝貢を受け入れさせ、また「鼓妖（大音の響く異常現象）」に關する下問に答えている。文章家として仕えつつも、宮廷文人や俳唱とはなるのではなく、國家への關心を持ち官吏として上申している。やがて辭賦の筆を斷つた時には次のように述べ、やはり社會を矯正する志のあることを吐露している。

以爲へらく賦は、將に以て風せんとするなり。……之れを正に歸さんとするも、然れども覽る者己に過てり。……賦の勸めて止めざる事明らかなり。又た頗る俳優の淳于髡・優孟の徒に似、法度の存する所、賢人君子の詩賦の正に非ざるなり。是に於いて輟めて復た爲さず。

楊雄の言う政治への關心、道義的な倫理觀は、本來は經學を身につけた官吏の説くべきことである。淳于髡・優孟のごとき俳優の言葉（『史記』滑稽列傳參照）とは區別されなければならない。同じことが蜀出身の辭賦作家である司馬相如や王褒にもあてはまる。司馬相如が「天子遊獵の賦」を作つたのは「正道に歸して之を論ず」（『史記』本傳）という目的があつたからであり、また武帝が獵を好んだのを上疏して諫めてもいる。唐蒙とともに西南夷を開拓したのは、地方行政官としての功績であり、「封禪書」を著して、『書經』の文辭を驅使したのは楊雄の模倣表現に先驅けたものである。王褒も「四子講德論」「聖主得賢臣頌」において、經書の文辭を織り込みつつ政治を論じ、道義を説いている。楊雄が司馬相如と王褒を同郷の先賢と見なしていた事は確かであろう^⑪。辭賦作家として任官

し、後に官吏として意見する處世は、司馬相如や王褒に通じるものである。ただし楊雄は後に、經書に摸して『法言』『太玄』を著した。司馬相如や王褒の爲さなかつたことである。

そこで楊雄は上京前、蜀にあつた時、辭賦作家としての生涯を望んでいたのか疑問が生じる。前節に見た、何武を始めとする人物のように經學によつて官を得、官僚となることも考えていたように思えるのだ。「少くして學を好み、章句を爲めず、訓詁に通ずるのみ」と言うのは、當時の經學者や博士には師事しなかつたことを物語っている。しかし後に「俳優の淳于髡・優孟の徒に似、法度の存する所、賢人君子の詩賦の正に非ざるなり」とまで非難する辭賦作家の道ではなく、經學によつて道を開くことも可能だつたのではあるまいか。

六 楊雄と何武

楊雄が十代から四十代初めに上京した頃までは、經學者が重んじられた博士弟子の募集も増加していた。『漢書』儒林傳によれば、楊雄が十代の頃、元帝は儒學を好み、一經に通じている者には賦役を免じている。博士弟子は二百人から千人に増やされ、郡國には鄉學の教官が置かれた。楊雄が上京した成帝末には、博士弟子は三千人まで増員されたこともあつた^⑫。

そこで考えたいのは、楊雄（前五三〜後一八）より二十歳ほど年長で、同じ郫縣出身の何武（前七五〜七二？〜後三二）の存在である。何武は楊雄の生まれる數年前の前六十年頃に王褒とともに宣帝に拜謁し、經學を治めた後、楊雄が上京するまでに、諫大夫、刺史、太守から、司隸校尉、京兆尹へと官を進めている。蜀という邊境にあつても何武の活躍は傳わつていたに違いない。宣帝より帛を賜り、博士に學んで『易』を治め、

射策甲科、賢良方正に擧げられ京兆尹となっていた二十歳年長の人物と、過去の人物である司馬相如や王褒のどちらが若き楊雄の敬慕の対象であったらう。

楊雄が上京した成帝期(前三三〜七)はまさに何武が三公へと登りつめた絶頂期であったが、楊雄は宮廷文人として仕えていた。續く哀帝期(前七〜二)になると何武は一旦解任され、五年後に復歸したが、二年後には王莽と對立して歸郷する。一方楊雄は官位こそ動かなかったが、『太玄』「解嘲」を著し、「鼓妖」に關する下問に答え(前五)、單于の朝貢を受け入れるよう哀帝に上申して帛五十匹と黄金十斤を賜っている(前三)。そして王莽が權を奪うと何武は自殺に追い込まれ、楊雄は大夫に昇進した。

楊雄が上京した四十代以降は、ともに長安にあった。しかし兩人に交遊の跡はなく、互いに言及した語も傳えられていない。何武は士を薦めることを好み、龔勝・龔舍や唐林・唐尊を推舉して名高いが、同郷の楊雄を推さなかった。楊雄も龔勝・龔舍を「楚の兩龔の繋ぎ、其れ清なるかな」(『法言』問明)と讚えながら、何武には言及しない。

楊雄と何武の間には、同縣出身で世代が近いこと以外に直接の繋がりは見出せない。むしろ、王莽に親しんだ楊雄と、王莽と對立した何武という對照的な存在である。その結果、王莽の浮沈とともに二人の生涯も交互に浮き沈みしている。言わば敵對する關係であつた。兩人が擦れ違ひ、互いに交わることがなかったのは、それぞれの蜀における經書に對する姿勢の違いから生まれていたように思われる。

七 楊雄にとっての經學と辭賦

楊雄はそもそも蜀での前半生から經學者とねじれた關係にある。楊雄

は當時の經學に對して強い不滿をもっていた。晩年に著した『法言』には「今の學や、獨り之れが華藻を爲すのみに非ず、又た從ひて其の聲訥に繡す」(『法言』寡見)と、當時の經學はハンカチに刺繡をするようなもので、不必要に飾りたてるばかりであると手厳しく非難している。當時の博士を中心とした經學には憤りを示すものの、經書についてはあらゆる説を包み込む偉大なもの(衆説の郛たり)、『法言』問神)と讚え、『易』に模して『太玄』を作り、『論語』を象り『法言』を撰した。その結果、「諸儒の或るもの譏るに以て雄の聖人に非ずして經を作るは、猶ほ春秋吳楚の君の僭號して王を稱するがごとく、蓋し誅絶の罪なりと爲す」(『漢書』楊雄傳贊)と儒者から激しい批判を受けた。儒者と楊雄はともに經書を厚く信奉しながら、對立している。それは、楊雄が蜀にあつて一經に通じず、都で博士に學ぶ機會のなかつたことに起因しよう。

ではなぜ一經に通じなかつたのだろうか。晩年には不必要に飾りたてる當時の經學への不滿を述べているが、前述した通り當時元帝、成帝の頃には盛んに博士弟子が採用され、何武のように博士に從い三公に至つた者もあつた。楊宣のように多數の儒者を育てた者もいる。こうした環境から推せば楊雄は蜀にあつて經學者に師事するのが自然である。たとえ辭賦や文章の制作を好んでいたとしても、蜀にあつて多少は經學を學んでいたであろう。ただそれが繼續しなかつたためか、一經に通じることはなく、博士などに學ぶ機會がなかつたものと思われる。

何武のように蜀出身でありながら、博士に學んで官僚になるのは狭き門であつたに違ひない。何武は十四、五歳の若さで益州刺史の前で王褒の詩を歌い、都の博士に師事している。五人の兄弟は皆な郡吏であつた。以上の點から考えると何武の家は、經濟的に豊かで刺史や作家との縁故に恵まれていた可能性が高い。それに對して楊雄の家は、貧困ではないが豊かでもなかつた。楊雄が經學者に師事しなかつた背景には、經濟的

な理由があつても不思議ではない。

また、『法言』では師の重要性について繰り返し説いている。楊雄が師事した人物には嚴遵と林閭翁孺の名が伝えられる。嚴遵は占卜家であり、『老子』を説く逸民であつた²⁴。林閭翁孺は深く訓詁を好み、輶軒使者の傳えた梗概を知る者であつた²⁵。では、以下の語は何を言うのであろうか。

師なるかな、師なるかな、桐子（子供のこと）の命なり。學に務むるは師を求むるに務むるにしかず。師は人の模範なり（學行）

一闕の市（一つの市場の意）も、異意に勝へず。一卷の書も、異説に勝へず。一闕の市には、必ず之が平（基準のこと）を立て、一卷の書には、必ず之が師を立つ（學行）

『法言』に師の重要性を説くのは、嚴遵や林閭翁孺を讃えるという意味もあろうが、師承を重んじた經學者の世界を想定した語であるように思えてならない。適切な人物に師事することの困難を楊雄自身が體驗していたように感じられるのだ。

無論、楊雄自身が煩瑣で師承の厳格な經學の世界を嫌い、辭賦の制作に専心した面もあろう。生涯に制作した多様な文體や『法言』や『太玄』のごとき作品を思えば、辭賦のような言語表現を好んだことは容易に理解できる。いずれにせよ何らかの理由によって、上京した際に楊雄は經學者ではなく、辭賦作家の道を選んだ。その理由は一つである必要はない。ただこの選擇から、その後の生涯が導き出されたことは間違いない。

假に經學者に従つて本格的に學ぶことがあつたなら、『法言』『太玄』のような經書の模倣作は制作不可能だつた筈である。儒者の世界では到底許されることではなかつた。だから『法言』『太玄』は、經書を用いつつも儒者を讀者とはしない、言語表現の可能性を追究する作品となつた。

それは生涯にわたり思想と言語の間を往來した楊雄の到達點と見做すことができよう。

おわりに

最後に楊雄晩年の當時の經學者への評價を見ておこう。『法言』の中に數名の經學者が取り上げられている。

守儒には、轅固、申公。菑異には、董相、夏侯勝、京房。（淵騫）

ここでは、儒學を守つた人物として轅固生と申公、災異に長じた人物として董仲舒、夏侯勝、京房が挙げられている。轅固生は景帝の時の『詩』博士であり、申公は漢初に浮丘伯に『詩』を學び千人の弟子があつた。董仲舒は景帝の時の『春秋』博士で、夏侯勝は宣帝の時『尚書』や『洪範五行傳』を説いた。京房は元帝の時、『易』を治め『京房易傳』を著している。

ここに挙げられた五名の内、夏侯勝と京房以外は漢初から景帝の頃の人である。『法言』には他に叔孫通、賈誼といった名も見えるが、やはり漢初の人である。叔孫通については「槩人」と厳しく批判し（淵騫）、賈誼は辭賦作家としての評價である（吾子）。楊雄の當時、多くの經學者がいたにも関わらず、彼らに對しては明らかに言及を避けている。楊雄の經學者への態度は明確である。そう考えると、時代の近い夏侯勝と京房の名は注意されてよい。

楊雄が同時の學者を取り上げていないのではない。既に挙げた嚴遵のほか、谷口の鄭子眞²⁶、楚の龔勝・龔舍²⁷を稱揚している。同時代人評價として特徴的なのは、蜀人の李仲元を稱讚して止まないことである。無名

であるが「其の意を屈せず、其の身を累はさず」、その姿によつて我が身が正される「世の師」であるという(淵騷)。「華陽國志」(卷十上、先賢士女)には「成都の人。少くして五經を讀み、章句を爲めず」とある。この李仲元を筆頭に、嚴遵、鄭子眞など『法言』は地方にあつて經書を學ぶ高潔な逸民にも近い人物を稱讚する。

楊雄は『法言』において當時の逸民を讀んで經學者を無視し、批判した。蜀にあつて嚴遵や林閭翁孺に學び、何武と親しむことのなかつた半生が反映されていよう。蜀での前半生は、經學者とのねじれを生み、後に著述の世界へと沈潜させる遠因となつた。楊雄が著述に沈潜する姿は逸民にも似ており、それも全て蜀での處世によつて導かれたものと考えることができる。

注

- ① 楊雄上京の年は『漢書』本傳贊の「初、雄年四十餘、自蜀來至游京師」に據る。
- ② 『漢書』地理志上には、犍爲郡は建元六年(前一三五)、越雋郡と牂牁郡は元鼎六年(前一一一)、益州郡は元封二年(前一〇九)にそれぞれ開かれたとある。
- ③ 羅二虎『秦漢時代の中國西南』(二〇〇〇年、天地出版社)は、秦漢期の巴蜀出身官吏を廣く調査し、朝廷での登用は武帝期前後に開始されていると指摘する(第四章、政治制度)。また、第三章、移民で楊雄を「非政府組織的私人性質的移民」と見なしている。
- ④ 『史記』本傳に據れば、司馬相如は景帝の郎を辭めた後、梁の孝王に仕えている。梁の孝王は前一四四に没しているので、相如の仕官は景帝が即位した前一五七く前一四四の間である。没したのが前一一七年であるから、仕官の後四十年に近い。そこで現在多くの論者は、二十歳前後で仕官したと考えている。
- ⑤ 本傳には上京前の記述として以下のようにある。「又怪屈原文過相如、至不容、作『離騷』、自投江而死、悲其文、讀之未嘗不流涕也。……乃作

書、往往摭『離騷』文而反之、自嶧山投諸江流以弔屈原、名曰『反離騷』。又旁『離騷』作重一篇、名曰『廣騷』。又旁『惜誦』以下至『懷沙』一卷、名曰『畔牢愁』。

⑥ 『楚辭章句』天問の王逸敘に「世相教傳、而莫能說『天問』、以其文義不次、又多奇怪之事。自太史公口論道之、多所不逮。至於劉向・楊雄、援引傳記以解說之、亦不能詳悉」とある。

⑦ 『六臣注文選』卷七、甘泉賦の李周翰注に「楊雄家貧好學、每制作慕相如之文。嘗作縣竹頌、成帝時直宿郎楊莊誦此文。帝曰、此似相如之文。莊曰、非也。此臣邑人楊子雲。帝即召見拜爲黃門侍郎」と見える。

⑧ 『古文苑』卷十及び『方言』附録の楊雄「答劉歆書」に、「雄始能草文、先作『縣邸銘』、『王伾頌』、『階闈銘』及『成都城四隅銘』。蜀人有楊莊者、爲郎、誦之於成帝。成帝好之、以爲似相如、雄遂以此得外見」とある。

なお「答劉歆書」の譯注を立命館大學白川靜記念東洋文字文化研究所の紀要第一號に掲載の豫定である。

⑨ 『漢書』王貢兩龔鮑傳に次のようにある。「嚴遵」博覽亡不通、依老子、嚴周之指著書十餘萬言。楊雄少時從遊學、以而仕京師顯名、數爲朝廷在位賢者稱君平德」。また嚴遵については注④を参照。

⑩ 『漢書』循吏傳、文翁の記事は以下の通り。「景帝末、爲蜀郡守、仁愛好教化。見蜀地辟陋有蠻夷風、文翁欲誘進之。……修起學官於成都市中、招下縣子弟以爲學官弟子、爲除更繇、高者以補郡縣吏、次爲孝弟力田。常選舉官僮子、使在便坐受事。每出行縣、益從學官諸生明經飭行者與俱、使傳教令、出入闔閭。縣邑吏民見而榮之、數年、爭欲爲學官弟子、富人至出錢以求之。繇是大化、蜀地學於京師者比齊魯焉」。

⑪ 『後漢書』獨行列傳に次のようにある。「譙玄字君黃、巴郡閬中人也。少好學、能說易・春秋。仕於州郡。成帝永始二年(前一五)、有日食之災、乃詔學敦樸遜讓有行義者各一人。州舉玄、詣公車、對策高第、拜議郎。……時數有災異、玄輒陳其變。既不省納、故久稽郎官。後遷太常丞、以弟服去職。平帝元始元年(後二)、日食、又詔公卿舉敦樸直言。大鴻臚左咸舉玄詣公車對策、復拜議郎、遷中散大夫。四年、選明達政事能班化風俗者八人。時竝舉玄、爲繡衣使者、持節、與太僕王憚等分行天下、觀覽風俗、所至專行誅賞。事未及終、而王莽居攝、玄於是縱使者車、變易姓

名、閒窳歸家、因以隱遁。……時兵戈累年、莫能脩尚學業、玄獨訓諸子勸習經書。建武十一年（後三五）卒」。

⑫ 趙賓については『漢書』儒林傳、孟喜に「又蜀人趙賓好小數書、後爲易、飾易文、以爲「箕子明夷、陰陽氣亡箕子。箕子者、萬物方荄茲也」。賓持論巧慧、易家不能難、皆曰「非古法也」。云受孟喜、喜爲名之。後賓死、莫能持其說。喜因不肯切、以此不見信」とある。

⑬ 楊宣については『華陽國志』卷十中、廣漢士女に「楊宣、字君緯、什邡人也。少受學於楚國王子張、天文圖緯於河內鄭子侯。師事楊公叔、能暢鳥言。長於災異。教授弟子以百數。成帝徵拜諫大夫。……平帝時、命持節爲講學大夫、與劉歆共校書。居攝中（後六・七年）卒。門生河南李吉、廣漢嚴象、趙翹等皆作大儒」とある。

⑭ 何武（前七五―七二？―三）の生涯を『漢書』本傳によつて略説しておく。何武は蜀郡郫縣に生まれ、十四、五歳で、王褒の作つた三篇の詩を歌つて漢徳を頌え、宣帝に拜謁して、帛を賜つた。その後、博士より學を授かり、『易』を治めた。射策甲科によつて郎となつたが免職され、賢良方正に薦められて諫大夫となり、揚州刺史に遷つた。その後も丞相司直、清河太守、諫大夫、兗州刺史、司隸校尉、京兆尹、楚内史、沛郡太守、廷尉などを歴任し、綏和元年（前八）には、御史大夫（後に大司空と改名）となり、汜郷侯に封じられ、食邑千戸を與えられた。その政治は經術に忠實で、後の博士戴聖をも恐れず、かえつて自省を促すほどであつた。また士を薦めることを好み、龔勝・龔舍や唐林・唐尊を推舉して名を顯かにした。しかも朋黨を憎み、文吏と儒者のことは雙方の言いつ分を聞いた。後に前將軍となつたが王莽と合わず、莽が盛んになり肅清を始めると、自殺に追い込まれた。何武の五人の兄弟も皆な郡吏であつた。なお何武の生年については注②を参照されたい。

⑮ 『漢書』趙充國辛慶忌傳に「初、充國以功德與霍光等列、晝未央宮。成帝時、西羌嘗有警、上思將帥之臣、追美充國、乃召黃門郎楊雄即充國圖畫而頌之」とあり、續けて全文が引用されている。

⑯ 『漢書』元后傳に「太后年八十四、建國五年（後二三）二月癸丑崩。三月乙酉、合葬渭陵。莽詔大夫楊雄作誄曰『太陰之精、沙麓之靈、作合於漢、配元生成。』とあるが、全文は『古文苑』卷二〇に収録されている。

⑰ 『漢書』游俠傳、陳遵に「先是黃門郎楊雄作酒箴以諷諫成帝、其文爲酒客難法度士、譬之於物」と言い、全文を引く。

⑱ 『漢書』匈奴傳下に「建平四年（前三）、單于上書願朝五年。時哀帝被疾、或言匈奴從上游來厭人、自黃龍・竟寧時、單于朝中國輒有大故。上由是難之、以問公卿、亦以爲虛費府帑、可且勿許。單于使辭去、未發、黃門郎楊雄上書諫曰」に續けて全文を引く。そして「書奏、天子寤焉、召還匈奴使者、更報單于書而許之。賜雄帛五十匹、黃金十斤」となつた。

⑲ 『漢書』五行志中之下に「哀帝建平二年（前五）四月乙亥朔、御史大夫朱博爲丞相、少府趙玄爲御史大夫、臨延登受策、有大聲如鍾鳴、殿中郎吏陞者皆聞焉。上以問黃門侍郎楊雄・李尋、尋對曰『洪範所謂鼓妖者也。……』。楊雄亦以爲鼓妖、聽失之象也」とある。

⑳ 楊雄は司馬相如については「蜀有司馬相如、作賦甚弘麗溫雅、雄心壯之、每作賦、常擬之以爲式（本傳上）」と述べているが、王褒に對する語は残っていない。注⑭に述べた通り何武が王褒の詩によつて名を馳せたために、言及しないのかもしれない。

㉑ 『漢書』儒林傳に昭帝から王莽に至るまでの博士弟子について以下の記述がある。「昭帝時舉賢良文學、增博士弟子員滿百人、宣帝末增倍之。元帝好儒、能通一經者皆復。數年、以用度不足、更爲設員千人、郡國置五經百石卒史。成帝末、或言孔子布衣養徒三千人、今天子太學弟子少、於是增弟子員三千人。歲餘、復如故。平帝時王莽秉政、增元士之子得受業如弟子、勿以爲員、歲課甲科四十人爲郎中、乙科二十人爲太子舍人、丙科四十人補文學掌故云」。

㉒ 王褒と何武が宣帝に拜謁したことは、『漢書』王褒本傳に「神爵・五鳳之間、……上頗作歌詩、欲興協律之事、丞相魏相奏言知音善鼓雅琴者渤海趙定・梁國龔德、皆召見待詔。於是益州刺史王襄欲宣風化於衆庶、聞王褒有俊材、請與相見、使褒作『中和』『樂職』『宣布』詩、選好事者令依『鹿鳴』之聲習而歌之。時汜郷侯何武爲童子、選在歌中。久之、武等學長安、歌太學下、轉而上聞。宣帝召見武等觀之、皆賜帛」とある。神爵・五鳳が前六一―五四で、文中の魏相が丞相であつたのが前六七―五九である（『漢書』百官公卿表下）ことから、兩者の重なる前六一―五九に三詩を歌唱したと考えられる。更に同書の何武傳には「神爵・五鳳之

開婁蒙瑞應。而益州刺史王襄使辯士王褒頌漢德、作『中和』『樂職』『宣布』詩三篇。武年十四五、與成都楊覆衆等共習歌之。是時、宣帝循武帝故事、求通達茂異士、召見武等於宣室」とある。王襄の指示で詩の作られ歌われた時、何武は十四、五歳であったと言うから、何武の生年は前五七二の間に於ける。

②③ 『漢書』何武本傳に「武爲人仁厚、好進士、獎稱人之善。爲楚內史厚兩龔、在沛郡厚兩唐、及爲公卿、薦之朝廷。此人顯於世者、何侯力也、世以此多焉。然疾朋黨、問文吏必於儒者、問儒者必於文吏、以相參檢。欲除吏、先爲科例以防請託。其所居亦無赫赫名、去後常見思」とあり、朋黨を憎み慎重に推薦し、人事にも嚴格であつたため「贊曰、何武之舉……考其禍福、乃效於後」と讃えられている。

②④ 嚴遵は『華陽國志』卷十上、先賢士女に據れば、字は君平、成都の人である。そして『漢書』王貢兩龔鮑傳に以下のようである。「谷口有鄭子眞、蜀有嚴君平、皆修身自保、非其服弗服、非其食弗食。成帝時、元舅大將軍王鳳以禮聘子眞、子眞遂不詘而終。君平卜筮於成都市、以爲『卜筮者賤業、而可以惠衆人。有邪惡非正之問、則依著龜爲言利害。與人子言依於孝、與人弟言依於順、與人臣言依於忠、各因勢導之以善、從吾言者、已過半矣』。裁日閱數人、得百錢足自養、則閉肆下簾而授老子。博覽亡不通、依老子、嚴周之指著書十餘萬言。楊雄少時從遊學、以而仕京師顯名、數爲朝廷在位賢者稱君平德。……自園公、綺里季、夏黃公、用里先生、鄭子眞、嚴君平皆未嘗仕、然其風聲足以激貪厲俗、近古之逸民也」。

②⑤ 楊雄「答劉歆書」に「獨蜀人有嚴君平、臨邛林閭翁孺者、深好訓詁、猶見輶軒之使所奏言。翁孺與雄外家牽連之親。又君平過誤、有以私遇、少而與雄也。君平財有千言耳。翁孺梗概之法略有。翁孺往數歲死、婦蜀郡掌氏子、無子而去」とある。

②⑥ 拙文『法言』の表現―經書の援用と模倣―（『學林』三六・三七號、中國藝文研究會）では、「楊雄は當時の今文經學に對して強い不滿をもつていた」ために『太玄』や『法言』によつて、時代に合つた經書を作ろうとしていた」と述べた（第四章）。そして『法言』が經書を典故に用いた表現作品であると考えた。

②⑦ 『法言』問神に「谷口鄭子眞、不屈其志而耕乎巖石之下、名振于京師。豈其卿。豈其卿」とある。

②⑧ 讚辭は既に六章に擧げた。『漢書』王貢兩龔鮑傳、龔勝・龔舍に「二人少皆好學明經」、「龔」舍亦通五經、以魯詩教授」とあり、二人が經學を治めていたことが判る。その上で何武の推薦もあり、ともに光祿大夫や太守に至つてゐる。高位にいたつてゐることを考えれば逸民とは言いがたいようだが、『漢書』王貢兩龔鮑傳は『法言』問神の文も引用した上で、嚴遵、鄭子眞とともに收載している。楊雄の影響が強く感じられる篇であり、他に收める王貢、鮑宣とともに好學で高潔な傾向の類似する人物として『漢書』は收めたと考えられる。

（本學文學部非常勤講師）